

仏教とガンジー主義についての省察

K・D・ガンガラデー

中川連一郎 訳

一 ブッタの教えについて

ブッタの教えは、「哲学的」そして「道徳的」という二つのグループに分けられます。この二つのグループは規則正しく織り合わされており、一方についての知識がなければ、もう一方を正しく理解することはできません。ブッタの哲学の基本的な原理は、因果論、あるいは縁起論です。この理論によると、連続的な存在は、原因と結果の繰り返しのなかにあります。無知は行動を起こさせ、その真の原因のなかで意識、現象、

性別、接触、知覚、渴望、貪欲などが生まれます。最終的な結果は破壊されますが、主たる原因である無知は破壊されません。

ブッタの別の重要な理論は、「四諦」に関するものです。第一の「苦諦」は、すべての存在は苦しみで満ちているということです。第二の「集諦」は、全ての苦には原因があるということです。第三の「滅諦」は、苦は原因から結果を成しているということです。最後の「道諦」は、苦を終わらせる方法があるということです。

なぜ、生あるものの存在には苦が満ちているのでしょうか。なぜなら、すべての生きとし生けるものは生老病死、そして再生を免れないからです。喜びや俗世的な幸福さえ悲哀へと導きます。なぜなら、それらはうつろいゆくものであり、喜びや幸福を失うことは、それらをもつていなかったときよりもさらに悲しみをもたらすからです。

ちょうど、名医が治療の前に疾病の原因を見つけ出すのと同じように、偉大なる精神の名医であるブッダは、人間のこの世における苦の究極の原因を見つけ出すことに挑戦しました。そして、その原因は無知であり、あるいはその無知から生まれる渴望であることを見出しました。ブッダはまず第一に、人々が自らの生についての無知、幸福への渴望を取り除くことを要求したのです。

ブッダは、苦と不幸について三つの事実を掲げました。第一に、自尊心は物質主義や苦痛の原因の一つであるとともに、精神的な墮落の原因の一つであるといふことです。第二に、この世に存在するすべては一時

に捧げた唯一の目的は、世俗的な病根に永遠にわたる治癒を与えることでした。それ故にブッダは、とりわけ倫理的でした。正しい人生への指示や、病んだ精神・身体の治療を処方する上でいかなる妨害をも許さなかつたのです。たとえそのことが、神や魂などへの懷疑を意味することになったとしても。

二 エゴを捨て去る

廉直な人生が仏教倫理のかぎであり、それがインドや他の国々で人気を博する一面です。ブッダが命じたように世俗生活への不満は、我々を出離の生活に導きます。しかしながら、その不満は単なる厭世的ななしとして理解されるべきではありません。それでも、ブッダの倫理は無常を説き、いわゆる世俗的快楽は痛々しい結果に終わると説きます。なぜなら、それらは「執着」を基礎としているからです。仏教が説く精神的動揺の論点は、人間の苦の原因の洞察、無知または無明の洞察を基礎とする事実です。この事実は、ブッダと彼の兄弟のナンダ王子の物語によく描かれてい

的なものであり、無常であるということと。第三に、我々の運命をつくるのは我々自身だということです。自分で蒔いた種は、自分で刈り取るということです。欲望は決して満たされません。マハヴィーラ（インドの修行僧で、ジャイナ教の始祖）は語りました。「もし、全宇宙とその富のすべてがあなたに与えられても、あなたの渴望を満足させることはできないし、あなたを守ることもできない」と。またガンジーは言いました。「この世界は、すべての人を満足させるには十分だが、ひとりの人間の食欲を満たすには十分ではない」と。スワミー・ヴィヴェーカーナンダ（インドのヒンドゥー教の指導者）は語りました。「まず欲望を殺せよ。これがすべての修行のなかで最も困難なことである。もし精神的到達の頂きを臨むことを欲するのならば、他の人々の救済に大いに励みなさい」と。ガンジーはそれを三つの単語で美しく要約しました。「放棄し、そして、楽しめ」と。

ブッダのこころは、すべての生きとし生けるものへの愛情で満ち満ちていました。彼の人生を真理の布教と。ナンダは魅力的な人格をもち、世界で最もハンサムな男と評されてきました。彼には、スンダリという当代一の美しい后がおりました。彼らは互いに深く愛しあい、離れることなどできませんでした。宮殿の私邸で彼らが我を忘れていたとき、かつては王族であったブッダが宮殿にやって来て恵みを請いました。ブッダは悟りを開き、世界の教師と知られていました。しかし、その身なりの粗末さから、ナンダ王の家来は誰も、

ブッダの到来と気づくことはできなかったのです。そのため、ブッダは城門の前で少し待ち、彼のアーシユラム（修行所）へ帰っていきました。その時、勇敢なメイドが彼に気づき、勇気を振り絞ってナンダ王の私邸に入り、彼に偉大な精神的指導者がこの王城へ托鉢に訪れたこと、しかし席はおるか、言葉さえも、施しさえも得ることができずに、まるで荒涼たる森から立ち去るようにして帰っていったことを伝えました。ブッダを大いに尊敬していたナンダは、メイドから聞かされた事実顔に顔を歪めました。彼は、ブッダに敬意を

表するために出かける許しを、その場でスンダリに請いました。彼女は、彼女の体に塗った白檀の練り粉が乾く前に帰ってくることを条件に、許しを与えました。

ナンダはブツダのアーシユラムへ急ぎ、間もなく到着しました。彼は師に頭をたれ、彼の怠慢を謝罪しました。ブツダは彼に、アーシユラムに留まり彼の不注意を黙想することを命じたのです。ナンダは誠実に努力しましたが、妻の美貌を忘れられず、瞑想は乱れがちでした。ブツダは彼を呼び、「あなたは美しい妻のことを考えて気が散ってしまい、彼女がいないことを強く感じているようですが、そうではありませんか」と語りました。ナンダは肯定しました。ブツダはナンダに目を閉じるよう告げ、そして、二人は浮かび始めた物語は語りまします。彼らは、乾燥した荒涼たる山の高さまで到達しました。ナンダは山の古く美しい木の乾いた枝の上に腰掛けている、醜い一服の猿を見ました。ブツダはナンダに「あのメス猿をごらん下さい。あなたの妻と比べて、あの猿は美しいと思いませんか」と語りました。ナンダは、「崇敬する師よ、どうか比較な

どしないでいただきたい。私は、我が愛しのスンダリの美貌とこのメス猿の醜さを比べることを、考えることさえできません」と答えました。ブツダは再びナンダに目を閉じるよう告げ、さらに高く上り始めました。しばらくすると、美しい天の乙女たちの住むインドラ神の庭園に到着しました。天来の美しさをもった彼女たちの魅力は、生身の人間であるナンダの目をくらませました。ブツダが、これら天授の美しさとスンダリの美しさの比較を尋ねたとき、ナンダは「崇敬する師よ、これらの妖精の美しさとスンダリの美しさの比較は、先ほどのスンダリとメス猿の比較と同様、考えられません」と答えました。

その後、彼らはアーシユラムへ戻りました。そして、ブツダはナンダに、「雑念が入ることなく瞑想するため、あの天の乙女とともに過ごすことを望むのであれば」と提案しました。このおかげで、ナンダはスンダリのことをすべて忘れ去り、瞑想に集中することができたのです。

数日間、ナンダは集中することができ、その後、ブ

ツダは再び彼を呼び、「今でもスンダリへの思いが邪魔しますか」と尋ねました。ナンダは、「崇敬する師よ、私は瞑想に心を奪われていたので、スンダリのおはよろか、女性のことさえ思いつくことはできませんでした」と答えました。ブツダは、「天の乙女たちと一緒に、インディラ神の庭園での快樂や享樂を熱望していたというのが事実ではないですか」と再び尋ねました。ナンダは、その通りだと告白しました。ブツダは、「あなたが考えている、あらゆる快樂がもたらされたのは間違いありません。しかし、その天の快樂は、あなたの妻との宮殿での快樂と同じようなものではないのですか。あなたの瞑想による功德の蓄えが尽きたとき、インディラ神の庭園の天の乙女たちと別れなければなりませんし、その時の別れの責め苦と毒牙のことを想像しなければなりません」と続けました。ナンダはその考えに身震いしました。するとブツダは、「それ故、もしあなたが永遠にわたる快樂、愉樂、平靜を求めるのなら、何の見返りや達成も求めずに、最高の真理に瞑想し続けなければなりません」と語りまし

た。『ギーター』（ヒンドゥー教の聖典とされる宗教叙事詩）もまた、同じことを説いています。

肉感的な快樂や世俗的享樂の無常さや、楽と苦、歎喜と悲哀など相反する経験の矛盾は、世俗的生活と距離をおくことを唱導する、覺者ブツダの想像力をふくらませました。仏教倫理の目的は、菩薩の最高の位です。菩薩は、確信、慈悲、博愛、無私を得るために、エゴをすべて捨て去り、怒りや憎悪、不正を越えなければならぬ者のことなのです。

ある時、偉大な学者が指導を受けるためブツダを訪ねました。「聖者よ、私は有名な学者です。しかし、私はこの人生は無意味だと知ってしまいました。どうすれば、すべての変化を超越した、不滅の自己を知ることができるかお教え下さい」と彼は尋ねました。ブツダは、「あなたは放棄しなければならぬ。それが、自己実現と至福への道です」と語りました。その教えのままに、その学者は彼の所有物をすべて棄て去りました。また、彼は妻と子どもも棄てました。しかし時が過ぎても、彼は心の平靜を見出せませんでした。彼は

再び、教えを請うためブッダのもとを訪ねました。再び、彼は同じ答えを受けました。「放棄しなさい。放棄するのです。これこそが、自己実現と至福への唯一の道です」と。学者は托鉢の鉢、粗末な衣服と毛布しか所持していませんでしたが、それらさえ彼は捨て去りました。そして長い時が経ちました。しかし、大切な目的地には遠くかけ離れていると彼は思いました。彼は自身に語りかけました。「放棄できる、唯一のもの。それはこの体だけだ。果たして私は自己実現の道を辿っているのだろうか」と。彼が大きな火を焚き、その火に飛び込もうとしたその時、ひとりの男が現れ、彼を押し留めました。「いったい何をやっているのですか」と男は諫めました。「あなたは、自分の体を破壊する権利をもっていると思っているのですか。その体は、あなたの両親が授けてくれたものです。あなたのものではないし、あなたが好きなようにできるものではありません。あなたの固執しているものを棄てなさい」と男は語りました。

その瞬間、捨て去らなければならないものは「エゴ」

であり、また自分本位や慢心から生じるものなのだと学者は悟ったのです。これは、我々もまた従わなければならない話です。

三 対話の力

ブッダは感情と欲望による抑圧を欲しませんでした。すべての生きとし生けるものへの愛を育むことは求めています。この成長する感情は全宇宙を満ちし、善が満ちあふれていかなければなりません。普遍的な愛、優しさ、慈悲をとりいれることは、よく知られている仏教世界において唱導されています。

ブッダは語りました。「火は火を消すことはできない」と。今日まで、我々は紛争、争いを解決できないでいます。敵意は敵意を越えることはできません。それは、ただ愛のみをもって克服することができなのです。争いを解決できるのは対話と話し合いです。戦争ではありません。これが、ガンジーの哲学の真髄でした。

変化に富むインドの仏教史にとって、一九五六年は画期的な年でした。当時のジャワハルラル・ネルー首

平静」です。

ブッダの実用主義は、彼が中道を好むことから明白です。彼は、生き方に関する極端な見方は避けました。彼は、肉感的放縱の人生も、酷烈な禁欲主義の人生も説きませんでした。ブッダは、幸福を実現する八正道を提案しました。この八正道とは、「正見」「正志」「正語」「正業」「正命」「正方便」「正念」「正定」です。

四 アヒンサーの重要性

マハヴィーラ（インドの修行僧でジャイナ教の始祖）、ブッダ、そしてガンジーは、最高の美德としてアヒンサー（不殺生）を説きました。彼らは真理よりも高くこれを掲げました。彼らは、真理への固執を非暴力の必要な自然の結果とみなしていたのです。

ブッダによると、ニルヴァーナ（死滅、消すこと）は、文字通り蠟燭を吹き消すことを意味します。真理はエゴのない段階を意味しますが、ニルヴァーナは、無欲の段階が、自身をゼロにすることを意味します。まったく、信じることを欲する人々のために十分な光があ

相は、ニューデリー・リッジにあるブッダ・ジャヤンティ公園の定礎式で、「このブッダ生誕二五〇〇周年の祝賀は、ブッダの帰郷を意味する」と語りました。アンベードカル博士は、一九五六年十月十四日、五十万人の支持者とともに仏教へ改宗することによって、この時を神聖化しました。このことによって、アンベードカル博士は、ブッダの帰郷を現実のものとしたのです。感激の声をもって、彼は語りました。「私は一九三五年にヒンズー教を棄てる運動を開始し、それ以来、闘争を続けています。この仏教への改宗は、私に多大な満足と想像を絶する歓喜を与えてくれました。私は、地獄から解放されたような感じでした」と。さらに彼は、「私は、人類には宗教が必要であると信じています。宗教が終焉するとき、社会もまた消滅します。つまるところ、ブッダの教えのように人類を保護し、統制できる政府はありません」と語りました。

仏教的倫理は、一貫して利他的です。ブッダの三つの宝石は、「徳性」「精神の集中」「智慧」であり、四つの梵住（崇高な境地）は、「友情」「慈悲」「愉悦」「心の

り、信じることを欲しない人々のために十分な影が存在するのです。数学的には、ゼロとは正と負の無限大が出会うポイントです。クリシュナ（ヒンズー教の最高神ビシュヌの第八化身）はアルジュナに語りました。「アルジュナよ、私はすべての存在の中心に在る宇宙であり、よって、私はすべての存在の始まりであり、中間であり、終わりである。よって、無もまた神のかたちなのである」と。

この点についてガンジーは、「経験と実験とは私を励まし、そして大きな喜びを与えてくれました。しかし、私の前には、なお、登るに困難な道があります。私自身を無に帰せしめなければなりません。人は、自らの意志で、自分を同胞や生きとし生けるものの最後の列に置くようにならないかぎり、救いはないのです。非殺生は、謙譲の極限です」と自伝のなかで語っています。

ブッダの教えは、「悪への不参加」「優良で高貴なもの蓄積」「精神の純化」の三つに要約されます。

ナーナク師（インドの宗教家、シク教の開祖）とガンジ

ーは二人とも、彼らの個人的な例証や人類解放の仕事への献身から明らかのように、仏教からインスピレーションを引き寄せました。

成功の人生のために、『グルバニ』（シク教の聖典）は三つの重要な原則を強調しました。それは、すべての個人が自身の潜在能力を十分に発揮し、社会の発展に貢献するという意味で、瞑想、労働、社会的責務の三原則に則った人生です。

ナーナクは搾取を非常に強い調子で糾弾しました。「もし衣服が血に染められるなら、それは犯されていると考えられる。であるならば、その血を流させた者たちが純粹な精神をもっていたなどと、どうしてみなされるであろうか」と。ナーナクは、裕福な貴族の邸宅の豪華な食事に招かれることよりも、粗末ですが、骨を折って稼いだ食事を、大工の家でいただくことの方を好みました。「精神的指導者と自己を称して、物乞いに廻る者を信用してはなりません。彼も、自らの腕で労働することによって、その稼ぎを皆に分け与えるのです」と。働いて稼ぐことと社会的目的とは、分けて

考えられる必要があります。

（K・D・ガンガラーデ／ガンジー記念館副議長）

（訳・なかがわ れんいちろう／デリー大学大学院）